

いきどうふ、同御吸物御鯛すいれ、三方羽もり松らすみ、牛房、同竹梅、具、數の、たこ、御膳、御汁、鹽、小、た  
がわし、ほなふく、まゆ、生みそ、になます、引而御やき物御煮物、御かうの物、重さかな、數さづ、け、牛、蒟

十二月略○中 正月物 一柏二合文十五 大々十三文七十 柚十三文三十 みかん百文七十 柑子五十文五十

橋五十同本 本だはら一束百文 串柿二束百文 ところ一升文廿五 柏五合文三十 九かち栗五合文百廿 ころ

がき百文八十 ほうづき十文十二 ほなが五十把文百五 ゆづり葉三把文七十 ころ昆布二把文五分 數之子壹

斗十九 いわし四百五十疋文三十三 串貝貳連文五分 壹本文廿五 ぶび十三文五分 八ごまめ壹升文七分

鳴二把文四分 四年正月十四日 一鳥丸前大納言様御出、御家來略○中 主計監物、大炊允右近、尙安、一同宰相様

御出、御節ニ候略○中 一葉室宰相様 江明日御節可被進之旨、被仰進候、

〔年中行事故實考正月〕蛤の吸物、大根汁形にて切 田作り鱈、是は南朝信濃宮中務卿 子の御子良王、宮

方の武士四家七名、字の者を召具、尾張の國津まへ移らせ給ふ時、元日始て此祝ひありて、子孫

長く津島に住給ふ、其佳例にて、當國の風俗を諸國に傳へ學ぶといへり略○中 四家は山川、岡本、七

名字は堀田、平野、服部、鈴河、村何れも子孫今ニ繁榮し奉仕す、麥飯、いなだ鱈、にちみ鱈其まい 皿に置

ねぶか汁、是は三河邊元朝の佳例に用ゆ、上代質朴の風を傳へて祝ふなるべし、富だはらはら

を結び、さんぎちやう二寸計の小木三枝、わ、是は伊勢内宮邊の佳例に用ゆ、年禮に客來れば、折敷

にさんぎちやうに田づくりかうじ置合て出し、次に芋頭を椀にもりて、寶珠と名付てすゆると

是も又上古質素の風なるべし略○中 鱧の子かすの子とい 押鮎あいきやうとい 愛敬の音に

り、鱧は倭字、西國にては高麗いわしといふ、朝鮮に多しと云、正字未考、和名かどをかすと唱ふ、音

便なり、其外諸の鹽者を用ゆるは、昔より京都は大和山城の地にありて、山中、海邊遠き國の俗を

傳來れるものと見えたり、